瀬やふち連続 舟運の難所

美観に心奪われ 新たな楽しみも

滔と（とうとう）

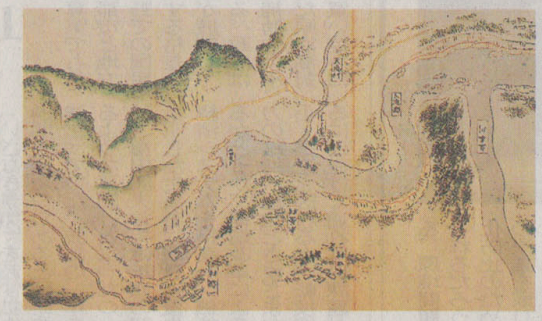
最上川今昔

第1部 つなぐ 4 五百川峡谷

白鷹町荒砥から朝日町を通り、大江町左沢に至る約三十キロの五百川（いもがわ）峡谷は、白波の立つ瀬やふちが連続する舟運の難所。切り立ったがけに阻まれ、集落からは最上川を見ることのできない部分もある。江戸時代中期の川絵図「羽州川通絵図」にも、「廣瀬」「地蔵渕」「水神渕」「三階滝」など、瀬やふちの名称が多く記されている。

五百川峡谷の転換期は、元禄年間に行われた難所の開削。米沢藩領から舟運を可能にするため、米沢藩の御用商人・大名誉教授（77）＝山形市西村久左衛門が実施した。事業が完成すると最上川上流の置賜地方も、中流以降の地域と同様に、西回り航路での物流が活発になった。それでもなお、多くの難所を抱えており、「幕府公認の艀（ひらた）船では、峡谷は通れなかったため、小型の小鵜飼（こうかい）船で左沢の舟屋敷まで行き、そこで荷物を積み替えた」と、横山昭男山形市緑町四丁目。米沢藩の船門家は、通船差配役としての安全な運航を図るため、大庄屋の佐竹長右衛門家は、通船差配役としてための綱手道の管理や人などを請け負った。

瀬やふちが連続する五百川峡谷。瀬の部分には白波が見える ＝朝日町



「羽州川通絵図」に描かれた五百川峡谷

朝日町エコミュージアム案内人の会の五百川峡谷案内人を務める若月啓二さん（77）＝朝日町三中＝は「今は許されないだろうが、自分たちが子どものころは、瀬に飛び込んで波乗りをしたりした。船にとっては難所かもしれないが、平野部とはまた違った美しさがある」と話す。アユやマスを捕らえる梁（やな）も多くあった。灯籠（とうろう）流しや、河原での芋煮会など、川は生活に密着していた。

一九六二（昭和三七）年、五百川峡谷上流に上郷ダムができ、景観は変化。生活様式も移り、川とのかかわりは薄れていった。

特定非営利活動法人（NPO法人）朝日町エコミュージアム協会副理事長の安藤竜二さん（43）＝朝日町大谷＝は子ども時代、最上川で釣りはしたが、泳いだ記憶はない。Zのような形に骨が曲がった魚がたくさん釣れたことを覚えている。「高度成長期で一番水が汚い時期。とても最上川に入ろうとは思えなかった。でも最近はきれいになってきた」。地域の人たちを講師にした同協会主催の講座「おらほの最上川学」を通して、最上川のファンになってきた。

昔の難所は、新たな楽しみをもたらした。峡谷は現在、カヌー愛好家にとって格好の遊び場だ。「カヌーも最上川の景色の一つになった」と安藤さん。休日になると、県外からも大勢の愛好家が訪れる。彼らの目当ての一つが、通称「タンの瀬」。明鏡橋上流にあり、瀬が三段階になって、すり鉢状に流れが集まる。周辺には岩の採取場があり、切り出された岩は蚕室の暖炉に使われた。切り取られて岩が階段状になったことから、今の流れができたという。

朝日町出身の大井寛治さん（25）＝寒河江市柴橋、会社員＝はシーズン中、週に一回はフリースタイルカヤックを楽しむ。始めたばかりのころは、瀬に近づくと、カヌーがひっくり返された。流れを読むことができないと、瀬には入れないのだという。愛好家にとっては、それが醍醐味（だいごみ）でもある。「川面から見る景色や空は、普段は見られないので好き。特に、タンの瀬の少し上流のフラットな部分は、両側は絶壁、川岸には変わった形の岩があり、ジャングルでこいでいるように感じる」。江戸時代、船で通行した人たちも、難所ならではの景観に目を奪われたのだろうか。

（滔々と 最上川今昔 取材班、題字は日展会員 植松弘祥氏）

山形新聞　2008年1月5日